

『忘れえぬ人』

東海大学東欧会会長
倉知徳幸（1984年度東欧課程卒業）

2018年12月10日 月曜日。欧州法人の支配人として、英国に着任して3年が経つ私は、今回、ブルガリアのソフィアへ英国ロンドンのヒースロー空港ターミナル3から、エアバス320型機の英国航空890便で飛び立つことになった。

その日、午前7時15分の搭乗前に、イタリア出張中である、取引先の日系自動車部品メーカーのバイヤーのお二人より連絡をもらったことから一日が始まった。バイヤーの方々からの相談内容は、2輪車の総本山市場のイタリアの部品メーカーから購入した部品の不具合発生で、何と実際の部品製造者は、イタリアの部品メーカー（L1）でなく、その下請けメーカー（L2）は、東欧のスロベニアやハンガリーの部品メーカーによるものであるという連絡であった。

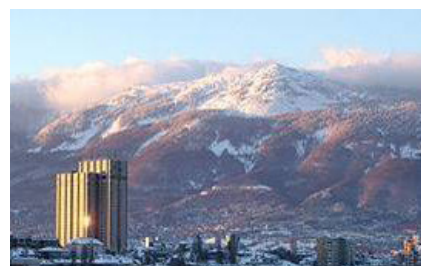
バイヤーA氏は、自分は、発注先のイタリアのL1までしか行かないので、後は任せたという。今日は仕事を早く切り上げ、知人の大学の先生を訪ねて、ローマの美術館でも行くとの考えであった。一方、もう一人のバイヤーB氏は、自分は、L2の所在する東欧まで足を運び、現場を見聞したいという。三現主義の精神で、部品の調達先にて発生している真の原因を見つけたいと述べられ、部品調達領域は、すでに東欧諸国まで広がっている事実を認識すべきとのご意見をいただいた。一連の判断を仰いだ私は、最終的にお二人の滞在を4日ほど延ばしていただき、バイヤーB氏の考えでスロベニアとハンガリーに向かう対応をするよう指示を出したのであった。

ブルガリア留学時代の恩人

ソフィア行きの英国航空890便は、朝霧で包まれたロンドンを立ち、2時間半ほど飛ぶと、セルビアのニシュの街を超えたあたりから、だんだんと高度を落とし始め、ついに目ざすバルカン山脈の山々が航空機の窓から見え始めてきた。海拔700mを超えるソフィア盆地は、雪化粧をしたピトシャの山々に囲まれ、山の麓に広がるソフィアの街には、昼間と夜間の寒冷差から、この日は雲海状に雲がソフィアの街を覆い、雲の間から、冬らしからぬ、強い日差しが差していた。

英国を拠点に仕事をする私は、先週、ブルガリアのソフィアに在住の吉田英二さん（小船井先生、藤先生が1968年にブルガリアへ留学された際、同時期に留学されている方で、私の留学時代に面倒を見ていただいた恩人であり、尊敬する商社マン）から、これまでにない、吉田さんらしからぬメール連絡をいただいた。

通常の吉田さんは、のんびりした感じの中味のメールで、次回、ソフィアにやってくる時は、好物のロンドンのピカデリーサーカスの日本食スーパーで販売している、日本風の食パン、アンパン、大福もちなどを何人分、持ってきてほしいというもので、ひとたび、お会いすると「ブルガリアならではのもの、東欧ならではのものを君は見



ソフィアの観光名所のピトシャ山と旧ニューオータニホテルピトシャ

つけられたのか。」という、いつもの常套句が必ず、発せられるのであった。しかし、今回、受け取ったメールからは、どうしても君に会いたい、話しておきたいことがあるとの、吉田さんらしからぬメールの内容となっていた。

折しも私は、ブルガリアの自動車部品メーカーとの未解決商談が残っていたことを思い出し、旧知の在ブルガリアの日本大使館の榊山一等書記官からの天皇誕生日パーティー（2018年12月11日開催）の招待状のことも思い出し、未解決商談を整理したのち、今回は、吉田さんの言う通りにしようと思い、吉田さんからのメールのコピーをポケットに入れ、会社の留守中のことを部下のF取締役役に任せ、ソフィア行きを敢行するに至ったのであった。

ここで、吉田英二さんに関しての詳細に触れておきたい。吉田英二さんは、1941年生まれで、学習院大学の在学中に市民運動で市川房江さんの影響を受け、大学卒業後、1970年ブルガリア政府の奨学金給付留学生の試験に合格され、ソフィア大学へ2年間、留学を果たすことになった。外国人のためのブルガリア語学院（ナセル学院）を経て、ソフィア大学へ入学を果たし、ブルガリア近代史を専攻されている。

私が知る限り、ブルガリア政府関連の奨学金給付を受けた日本人の学生としては、猪谷晶子さん（現：日本ブルガリア協会理事長）と吉田英二さん、そして、土岐啓子さん（東京丸一商事OG）のお三方が、事実上の草分け的な存在であったと伺っている。なお、吉田さんは、同時期に東海大学から研究者として初めてブルガリアへ派遣された、小船井先生、藤先生とも滞在時期が重なり、お二人とも親交を深めておられた。

私が1982年にブルガリア政府の協定留学生として、ブルガリアへ留学した際は、到着早々から、小船井、藤両先生の教え子として、何かにつけ、吉田さんには叱咤激励をしていただいた。また、私の留学中には、三菱商事関連の日本製機械設備納入の通訳業務のアルバイトや1983年の安倍外務大臣のブルガリア訪問時の報道担当通訳に推薦をしていただいたり、まさに弟分のように、親身に面倒を見ていただいたことを昨日の出来事のように覚えている。

ブルガリアでの活躍

吉田さんは、ソフィア大学での留学を1972年31歳で終えることになり、日本への帰国を計画したものの、最終的に帰国の道を選ばず、当時、ブルガリアに進出した三菱商事のソフィア駐在員事務所への就職の道を歩むことになる。当時、日系企業でブルガリアへ進出していたのは、三菱商事、三井物産、日武バルイースト、富士通ファナックの4社のみで、現地採用といえども採用に漕ぎつけたのは、吉田さんの評価が非常に高かったといえよう。事実、入社早々の吉田さんは、対ブルガリア日本政府の円借第1号案件である、ニューオータニ・グランドソフィアホテルの建設プロジェクト契約を三菱商事にもたらす成果を上げている。

社会主義国であったブルガリアは、1976年に他の東欧諸国同様、外国企業の駐在員事務所の設立認可をする法律を制定し、ブルガリアにも10社ほどの日系商社が進出することになった。当時の日本・ブルガリアの両国の貿易取引額は、1970年に3,000万US\$が、1988年には、2億US\$に達している。ブルガリアからは、ワイン、乳酸菌、葉タバコの輸出に対し、日本からは、ホテル建設、発電所、繊維、化学プラント、港湾施設、地下鉄、鉄鋼製品などブルガリアの近代化に必要な産業育成プロジェクト関係の機材や設備が輸出され、ナショナルプロジェクト案件の受注は、三井物産と三菱商事の戦いが続いていたが、80年代の重要プロジェクトは、吉田さんの関わる三菱商事が応札する傾向が強くなった。

とりわけ、三菱商事は、勝ち技というべきか、輸入国、ブルガリアに代わり、取次ぎ役である商社が輸入者に代わり、外貨を稼ぐという新方式を考え出し、これまで、誰も注目をしていなかった、ブルガリア製の化学肥料の尿素を南米に輸出するという、度肝を抜く画期的な方法で外貨を稼ぎだし、得た外貨で、他の輸入品の支払いに充てる決済方法を編み出している。また、それまで、ソ連より輸入に頼っていたTV受像機のブラウン管を日本の東芝製に代替させ、ブルガリア国産のカラーTV生産を推進させ、他の東欧諸国へ輸出を果たすなど、極めてユニークな取引を発信させていた。三菱商事は、さらに1979年に開業し、設備の劣化が進んでいた先述のニューオータニホテルに対し、1988年、開業当時の基本設計を担当した、建築家の黒川紀章氏を訪ね、動かし、三菱商事がホテ

ルの経営および、リノベーション計画に取り組み、20年間の円借款ローンを遅延なく、ブルガリア政府に遂行をさせている。

吉田さんは、2001年3月に60歳の区切りで一旦、三菱商事のソフィア駐在員事務所長を退職されるが、すぐに顧問として同事務所と再契約をされ、2009年まで、三菱商事のブルガリアの顔として、数多くのプロジェクトに関わられている。2006年からは、当時、ブルガリアを訪問された、徳洲会会長の徳田虎雄氏からの要請で、徳洲会ソフィア病院の社長として、バルカン半島で最高の医療水準を誇る医療施設、ソフィア徳洲会病院の建設にも寄与されている。

一方、プライベートでは、ご本人の世話好きの性格から、ソフィア日本人会の役員を永らく続けられ、ブルガリアに在住する日本人の方々のよろず相談役として面倒を見られている。元来、恥ずかしがり屋の吉田さんではあるが、その功績を評価され、2008年7月に日本国外務大臣表彰（日本とブルガリアの相互理解の促進）、2016年11月には、秋の叙勲で在留邦人への福祉功労で旭日単光章を受けられている。

吉田さんから久しぶりのお招き

さて、その吉田さんから、2018年12月10日にソフィアに招かれた私であるが、夕刻、所用を済ませ、三菱商事ソフィア駐在員事務所の所長であり、私自身のソフィア大学の後輩にもあたる、明父（あぢち）博文さんが準備した自動車に乗り、ソフィアの南西部にあるパンチャレボ湖の別荘地域にある、吉田邸に向かったのがあった。

12月10日の夕刻の吉田邸は、雪明りに映えていたのであるが、いつもは、敷地に立ち入るやいなや、大型の白の雑種の番犬が必ず出てくるのであるが、今回は、その番犬が現れず、何やら違和感と緊張感をもちながら、玄関から数十メートル離れた吉田邸の母屋に向かった。

私の前に現れた吉田さんは、髪もかなり白髪が多くなり、腰痛のためか、ゆっくりと杖を頼りに進むのが精一杯との感じであったが、客間では夫人のマリアさん、娘の祐子さんにも久しぶりにお会いし、談笑することができた。

吉田さんからは、開口一番、直近差し迫った、英国のBREXITは、どうなるのかなど、ブルガリア人にとって、貴重な働き場所である英国で、ブルガリア人労働者が排除される心配やご自身が社長をされている徳洲会ソフィア病院を徳洲会本部がトルコの医療法人に売却交渉が始まっている話や、ここブルガリアに住んでいないとわからない話題があふれるような勢いで吉田さんの口から出てくるのであった。特に直近のブルガリアの経済界の内部の様子や2018年1月に安倍首相が日本の総理大臣として初のブルガリア訪問をされた時の状況や日本企業がアニメ制作にブルガリアのコンピューターグラフィック制作会社を起用した、活きのいいニュースにも触れることが出来た。

それから、私が経営をする会社の子会社が隣国のルーマニアで自動車販売ビジネスで好調を続けていることやドイツ自動車部品メーカーの下請けにブルガリアの部品メーカーを起用し、その後、ドイツやフランスの企業名でEU外へ輸出しているビジネス展開も吉田さんは、ご存じで、一連の貿易統計泣かせの商取引について、この時は、珍しく、ルーマニアを相手によくぞ、頑張ったとのお褒めの言葉をいただいた。

時のたつのは非常に早く、その後、ご息子が経営するソフィア中心街の鷺の橋近くにある、レストランに場所を変え、早速、日本大使館に勤務する東海大学卒業の野村理事官を呼び出し、夜半まで、吉田節を伺うことになった。

吉田さんは、私がお会いした2018年12月下旬以降に大きく体調を崩されることになり、年が明け、2019年幾度か、徳洲会ソフィア病院へ入院されることになった。吉田さんは、残念ながら、体調は回復せず、最終的には、ご家族に看まもられながら、2019年8月4日の猛暑の日に78歳でソフィアのパンチャレボのご自宅でご逝去されている。

吉田英二さんは、何よりもブルガリアの産業界の器づくりに多大な寄与をされた方である。とりわけ、商社業界では、時の先頭を常に走る、トップランナー的な存在で、吉田さんの後を追うように商社業界に入った私にとり、夢の存在ながら、師匠のような位置づけの人物でもあった。また、東海大学にとっても吉田さんは、この上ないサポー

ター的存在の人物であったと言っても過言でない。とりわけ、東欧会のメンバーの何人かは、吉田さんには、大きな関わりがあり、いろいろな影響を受け、各々の人生の岐路で、勇気づけられたことを決して、忘れてはならないと思っている。

今年もまもなく12月10日がやってくる。吉田さんの常套句である、「ブルガリアならではのもの、東欧ならではのものを君は見つけられたのか。」があたかも今、耳元から聞こえてくる感じがする。吉田さんのこれまでのご指導とご鞭撻に感謝を申し上げ、心よりご冥福をお祈り申し上げたい。
